

# 私たちが戦争しない未来をつくる—安倍政治を終わらせよう

5月19日千代田区憲政記念館にて、高野孟氏（ジャーナリスト）、桜井みぎわ氏（弁護士）、奥田愛基氏（シールズ）、山口二郎氏（法政大教授）、菱山南帆子氏（総がかり行動実行委員会）が発言者となり、「さあ、安倍政治を終わらせよう」5.19集会が開かれた。



政治を変え、未来を私たちの手に取り戻す絶好のチャンス。6月5日の国会大包围行動を10万人を超える人で埋めつくし参議院選挙勝利の追い風にしよう、大きな山を動かそう—集会の最後で菱山南帆子氏はこう訴えた。

この集会に先立ち衆参の副議長に提出された戦争法の廃止を求める署名は1200万筆、そこに込められた思いは、いま参議院選挙の1人区すべてで市民連合・野党統一候補を立てることに結実しようとしている。32のすべての1人区での勝利と安倍政権打倒をめざし、巨大なうねりづくりだし平和な未来を切り拓こう。

## 譲れない一線 桜井みぎわ（弁護士）

安倍政権は国民の命と平和な暮らしを守るためといって安全保障関連法を成立させた。しかし、この法律は米国と一体となって軍事行動を行う、あるいは日本を戦争するに国にする憲法違反の法律だ。米国などと軍事一体化をすすめていけばテロの脅威に日本国民をさらすことは、欧州諸国の例を見れば明らかだ。



私たちの命や暮らしを守っているのは安全保障関連法ではなく、平和主義をはじめ、表現の自由、思想・良心の自由、生存権、労働者の権利など、さまざまな人権を保障している憲法だ。

私たちには、どうしても譲ることのできない一線がある。それは、私たちの人権を保障している憲法を無視することは許さないという一点だ。憲法違反の安全保障関連法の廃止をめざし力を合わせよう。

## まだ、弾は残っているがよ 奥田愛基（シールズ）

「まだ、弾（たま）は残っているがよ」とは、菅原文太さんの「仁義なき戦い」のラストシーンの台詞だ。この菅原文太さんが沖縄県知事選挙で翁長さんの応援に駆けつけ、安倍政権と相手候補に向かって「まだ、弾は残っているがよ」といった。



このときの応援演説の意味について生前、菅原文太さんはこう語っている。「その弾の正体は、

これまで自分が勉強してきたことや周囲の人たちから受けた愛情や支えと思えばいい。本当に自分が勝負をかけたときに、その弾をぶっ放せばいい。その弾が当たらなくとも、懲りずに、まだ弾は残っていると強がって生きればいい。その繰り返しだ」と。

このような菅原文太さんの応援もあって、翁長さんは歴史的な勝利を収めた。最後に一言いいたい、「まだ、弾は残っているがよ」。

## 国会包囲の熱意を選挙闘争へ 山口二郎（法政大教授）

参議院選挙に向けて野党結集がすすんできた。参議院選挙の前哨戦ともいわれた北海道5区の衆議院補欠選挙は、自公勢力に力負けした。しかし、手応えも感じた選挙だった。この補欠選挙は衆議院議長をやった町村氏の吊い選挙であった。投票所が閉まると同時に自公候補者の当確がでもおかしくないような選挙だった。



それが、市民連合・野党統一候補の池田氏が1万2千票差まで迫った。出口調査では無党派層7割が野党統一候補に投票。投票率は57%、もし60%以上なら逆転勝利したと言われている。無党派層は潜在的に安倍政治は嫌だと思っている人が多い。従って、この人たちを投票所に向かわせることができれば勝利の道は開ける。ここが、北海道補欠選挙の最大の教訓だ。

国会前でたたかった熱意を、今度は選挙に向けて友人や知人、親戚に投票に行こうと働きかけることが大事だ。今夏の参議院選挙は戦後憲法体制の破壊を目論む安倍信三を返り討ちにする選挙だ。

（記 16.5.24 HT）